巻　頭　言

幸せの秘けつ

副院長　最　所　裕　司

私が好きな小説家の一人に宇江佐真理という作家がいる。女性ならではの細やかな心情表現が上手く、味わいのある江戸時代を中心にした時代小説を書く作家だが、2015年11月乳がんのため66歳で亡くなった。新しい作品が出るのを楽しみにしていたのでとても残念だ。

乳がんは女性の12人に１人が罹患する（人口動態統計2015年より）と言われ、右肩上がりの増加を続けている。日本では今や、３人に一人が癌で亡くなると言われている。近年、癌治療に対し、さまざまな治療が開発され、がん患者の５年生存率が向上し、また治る時代になってきている。私の専門領域の癌の一つにメラノーマがある。これは皮膚癌の中で悪性度が高いことで知られている。これまで施行していた化学療法は奏効率10～20％と標準治療とは言いがたいもので、この状況が約30年続いていた。ところが、2014年７月に、進行したメラノーマに対する画期的な薬剤が世界に先駆けて日本で承認された。これはメラノーマの治療にたずさわる医師たちが待ち望んでいた薬剤だった。この薬はこれまでの抗がん剤とは異なる概念で効果を発揮するもので、癌細胞が出す物質（免疫細胞の攻撃にブレーキをかける）の作用をブロックする画期的なもので、ステージ４の生存率が大きく向上した。

この新しい概念から誕生した薬剤は、メラノーマだけでなく他の癌にも効果が認められ、2015年12月切除不能な肺がんに対し適応追加となった。今後、さらに他の癌にも適応が広がる可能性がある。現在癌治療に対し、より侵襲の少ない手術法の開発、また遺伝子レベルでの応用、ある種のウイルスの利用、もちろんiPS細胞の利用など、さまざまな研究がされており、今後癌治療はますます進化することが予想される。しかし一方でこれらの治療費が問題になってきている。前述の薬剤は１人の患者に年間約3500万円の費用がかかる。肺がんの適応患者は年間約５万人と言われており、その費用は年間約１兆7500万円になり、年間約40兆円の医療費をさらに押し上げることになる。がん治療にたずさわる者として治療成績が良くなることは歓迎だが、医療費のことを考えると複雑である。

さて先日、あるテレビ番組でハーバード大学のある精神科医教授の興味深い話を視聴した。その演題名は「幸福な人生の秘けつ」というもので、ハーバード大学が1938年から様々な階層の724人の若者の75年間を継続して調査、分析して分かったことを発表するものだった。この長期の追跡調査で、幸福な人生を送るために何が必要かとの問いの答えは、財産や地位や名誉ではなく、「家族や友人、近所の人といい人間関係をつくること」というものだった。いい人間関係を造る人は脳の老化が遅く、病気にもなりにくく、コレステロール値などは関係ないというものだった。このことは厚生労働省が進めている健康日本21の活動につながるもので、生活習慣病予防のためのメタボ健診の項目のほかに、この視点を考慮した政策を加えれば、医療費の問題を解決する糸口の一つになるかもしれない。